
● 沖 縄

上 地 隆 裕

今年の当県楽界で目立ったのは、小規模だが質の高い公演が相次いだことである。またシーズン全体を通して、全ジャンル（ただしピアノ分野を除く）で底上げが堅調に進み、ゆるやかではあるが、ファン層の拡大も認められた。（琉響、沖響、沖縄フィルの各定期、県出身のベスト・メンバーを主体に特別編成した楽団によるベートーヴェンの交響曲第9番（指揮は三ツ橋敬子）の公演が、いずれも満席を記録したことからも明らかだった。）

しかしそのように肯定的な展開が進行する反面、応援団の役目を負う筈の、マスコミの目配りの悪さは、相変わらずである。特定の個人、団体にのみページを割かず、よりフラットな視点から「県楽壇の盛り立て役」を期待されているにも関わらず、ある種の権力然とした態度で演奏の現場を軽視するのは、クラシカルの発展を阻むものでしかない。もっと進取的態度で、演奏芸術担当記者の養成を真剣に行って欲しい、と願わずにはいられない一年でもあった。

総論はさておき、これからシーズンの収穫と思えた公演、について述べていきたい。

まず企画力と内容の濃さの両面で群を抜いていたのは、「ビューロー・ダンケ」の公演シリーズだった。1シーズン8公演を提供する内容だが、そのライン・アップはいずれも、テーマの明確さが光った。白眉は年末の「ヴェリタスSQ=弦楽四重奏団」公演。楽員は全員若手。中央でも滅多に味わえない「格別の」音色で聴衆を魅了した。

同シリーズではまた、県内、県外（国内）、そして海外の若手奏者を別々に招聘し、三者の「技量の違い」「感性の発露の方法の違い」「奏法の違い」等を提示。クラシカルの最前線と、発展途上の当地との差を浮上させ、聴衆に刺激を与える公演を提供した。

弦楽ジャンルの収穫は、宮田大（チェロ）、ドミニカ・ファルガー（ヴァイオリン=ウィーン響第二ヴァイオリン首席）、工藤すみれ（NYフィル=チェロ）、小倉幸子（ヴィオラ=シカゴ響～フィルハーモニア管（英））幣隆太郎（コントラバス=シュトゥットガルト放送響）、そして小品だけに終わったが、最高齢奏者イヴリー・ギトリスの4人。特にファルガーは、県出身の弟子・上地実実を中心に編成した「舞踏会オーケストラ」（楽員の大半は県出身者）をひき振りし、ウィーンのワルツのみを演奏して、本場の正調ウィーン節を聴かせた。メンバーはさぞ貴重な経験をしたに違いない。また同団は、サミット会場で「ウィーン風の琉球バル（舞踏会）」を催すという、ユニークな企画で伴奏を務めた。

次いで管楽では、ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズと川上一道の公演。前者はバイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響、及びサイトウ・キネン・オーケストラの楽員で構成された実力者揃い。しかも宮古島まで遠征し、島民を喜ばせている。

鍵盤楽器の分野は、唯一低調に終始したが、その中で溜飲が下がる思いを味わえたのは、清水和音が琉響の定期で弾いたチ

ャイコフスキーの第一番コンチェルト。

続く声楽分野は例年同様、好調を維持し、オペラの本格公演が相次いだ。特にヨーロッパで学んだ師を招いて、本場のムードを紹介する県出身者の企画が秀逸。上演された演目は、「フィガロの結婚」「椿姫」「カルメン」（宮古島と八重山）「オテロ」の全て全曲版。

最後にオーケストラだが、琉響は大友直人の指揮で第27、第28回目、沖縄響は第59回目、沖縄フィルが第8回目、そして大度室内管も同じく第8回目の定期をそれぞれ成功裏に終えた。また夏の6月に特別編成の楽団を起用し、ベートーヴェンの第9交響曲（指揮は三ツ橋敬子）で高水準の演奏を聴けたのも、収穫の一つであった。（完）